

令和2年度 富山県環境審議会 野生生物専門部会 議事録

- 1 日 時 令和2年8月5日(水) 10:00～12:00
- 2 場 所 富山県民会館611号室
- 3 議 事 (審議事項、報告事項)

〈審議事項〉第3期イノシシ管理計画について

(委員)

量が多いので、間を置いて読むと、ちょっと分かりづらいところが幾つかあった。

例えば、イノシシの高山帯のところだが、普通にこれを読むと、定点カメラでの観察や目撃情報が寄せられるようになっているが、生息状況が確認できる痕跡等は発見されていない。今後、高山帯で生息が確認された場合は、関係機関と対応を協議するということだが、生息という言葉がよく分からない。今後、対応を関係機関と協議するということだけでいいのではないかと思う。

あともう一点は、ジビエのところだが、現状では利用できないため、安全に利用することを目指してとか書いてあげないと、ちょっと読んでいても分からない。

(事務局)

まず生息動向、高山帯については、こちらの思いとしては、入ってきている状況はカメラで確認しているが、定着している状況にはないという理解をしていて、定着してきた段階で、捕獲まで実施する必要があるということで、こういう書きぶりにした。

ただ、指摘のとおり、一般の県民がこれを読んだときに分かるかというところ、書きぶりは再度少し見直しをしたいと思う。

(委員)

たしか検討会で環境省の方から質問があったとも聞いているので、環境省でも、もちろん協議、対応を考えているだろうし、表現を考えてもらいたい。

(事務局)

C S Fの関係については、指摘のとおり。分かりにくい文章になっていると

思うので、書きぶりについてはもう一度精査したい。

(部会長)

今ほどの高山帯の定点カメラにはイノシシが時々映る。その場所に定着している。夜になると出てきて、必ずそこで高山植物を食べ荒らし、掘り返す。やはり、その場所がイノシシにとって重要な生息域になっている。

(専門員)

富山雷鳥研究会が設置しているが、今のところイノシシに関しては、去年も映った。場所はソーメン滝を見るスペースがありますが、あそこに設置したカメラでここ2年間ぐらい連続して映っているが、単体であり、周りをずっと調べたが、掘り返し等がこの周辺域にはほとんどなかったもので、通過しているだけだと判断したところと、カメラの状況を見ても、カメラまで近づいてきて、何か不審に思って、そこから引き返すという状況の映像が映っているので…。今のところはそれ以外の高山帯にイノシシは映っていない。周辺を探しても掘り返し等の跡が見られないという現状である。

2年ぐらい前に、カルデラ博物館の弘法の北にイノシシのかみ跡を、見たことがある。

(専門員)

私自身も駆除には携わっているが、山間部のほう、特に県西部、こちらのほうについてはちょっと情報が不足している部分ある。

実際に携わった中で思うのは、農繁期、特に水田、こちらの被害が多いので、そちらのほうの防除が中心になってしまうが、高山帯についても関心は持っている。

高山帯でも何らかの食べ物を探して定着する可能性はあるのではないかと思う。実際、長野県、岐阜県等でも被害は出ているので、富山県の分布は看過できない。

(部会長)

今年の冬は、いわゆる猟期は雪が少なかった。雪が少ないと狩猟者もイノシシ捕獲が減っていると思う。

(専門員)

付け加えていうと、イノシシがドングリを好んで食べることによって、ほかのドングリをよく食べていた動物の生息域が若干変わっている。イノシシが多

く出るようになってから、山鳥の生息域がかなり変わっているという印象がある。餌がなければ生き残っていけないので、餌のあるところへ移動していくというのは当然だと思う。

あとは山芋、山芋がなくなれば、当然そのつるにできるムカゴもなくなる。ムカゴもたくさんの動物が食べているので、これがなくなればほかへ移動せざるを得ない、またほかの食べ物を探さざるを得ないといった状況になるので、そういった観点からも、イノシシは数を減らすべきではないかなと思う。

(専門員)

先ほど指摘のあったメッシュ図の最新版が平成24年で、富山県がいろいろセンサーカメラとか立山アルペンルートにつけて、それに映っているので、生息範囲自体が県内全域に生息しているけども、メッシュのほうも、最新のものがあれば、デバイスも含めて検討したらどうか。環境省でも協議会の中で、イノシシも若干含めたニホンジカの対策方針を定めているので、その中で高山帯に生態系被害が出てきた場合は、環境省なり国有林のほうでどういうふうに捕獲も含めてしていくかということになる。

情報が、高山帯でも生息は確認されているという状況だと思うので、誤解のない表現にしてもらえれば問題ないと思っている。

あと、先ほど参考資料の中で、氷見市が相当イノシシの捕獲数が急増している状況で、石川県などは、平成29年度からさらにイノシシが増えて、令和元年度は未公表となっているが、もし10月までに石川県とか福井県のデータがあれば、可能な限り記載いただきたい。また、石川県との連携や広域的な取組みについて、何か富山県で考えていることがあれば、教えてもらいたい。

(部会長)

高山帯については、前段のとおり取り入れてもらいたい。

石川県は能登を中心に増えている。富山県でも氷見。環境審議会では氷見のイノシシを何とかしてくれという話があった。だんだん能登半島の方に向かって移動していく。石川県でも能登が一番多いのではないかな。

今ほどあったように、石川県との連携等々、コンタクト、情報交換はしているのか。

(事務局)

高山帯は今後修正ということで、県西部のイノシシ捕獲の話については、先

ほど参考資料の捕獲数を見てもらったが、このうち有害だけだが、市町村別も記載している。7,558頭のうち氷見市で3,238頭ということで、かなりの割合が県西部のほうでの捕獲になっている。当然石川県でも増えているということで、石川県とは常に情報交換をしながら、捕獲も行っている。

特に、昨年度からCSFに関して、対策として捕獲を強化していくということと連携している。経口ワクチンの散布も連携をして行っている。

捕獲自体については、あくまでも県または市町村の特に猟友会を中心とした捕獲になるので、各県がお互いに目標等を確認しながら、しっかりと進めていく段階である。

氷見市で捕獲数が多いのは、当然生息数も多いからだ思っていて、氷見においては里山林が中心で、広葉樹等を含めて生息しやすい環境にあることなどが大きな理由であると思う。

里山林が支えられる潜在力、動物を支える潜在力がかなり高いと認識をしている。

また、氷見市は特に竹林の分布も非常に多い。県下の竹林の6割、7割は氷見市にあるので、そういう部分も若干影響があると思っている。

(部会長)

石川県と連絡を密にして情報を集めてもらいたいと思う。

(専門員)

個体数管理のところだが、CSFで死亡するものがあるということで、前出していたのより下げてきている、それと捕獲する側の能力も加味すると妥当な数字とは思いますが、逆に2,600頭に抑えるという目標を下げて、前のおりの大きい数量にするという考えはなかったのか。

(事務局)

指摘のとおり、本来であれば前倒しで捕獲をさらに強化していけばいいが、この辺は捕獲隊の意見である。特に、昨年度の8,172頭というのは、かなり尽力をいただいていた数字と認識をしているので、極端に上げるのではなく、この捕獲圧をいかに継続してしっかりかけていけるか、少しずつ強化しながらしっかりかけていけるかというところを考慮しながら、今回設定したので、CSFの減少率と捕獲の強化、両方のぎりぎりのバランスをこれで示したという考えである。

(専門員)

難しい数字だと思うので、これで結構だと思う。

ただ、状況を見ながら、実際は2,600頭に抑え込んでいるという状況でない気もするので、生息調査をしっかりと、場合によっては変更等も考えてもらえればと思う。

(部会長)

幾つか委員から質問、提案もあったが、新たに取り組む課題でなく、これまでのデータについての質問だったと思う。

(事務局)

本日の意見については、修正の上、部会長と相談の上、その後修正し、パブリックコメント等に臨ませてもらいたい。

〈報告事項〉 特定鳥獣管理計画の進捗状況について

(委員)

どの動物についても、きちんと調査して評価しているなという印象を受けた。狩猟者に感謝したい。

ただ、狩猟者が高齢化しているということは前々から聞いていたが、免許の取得数も、実際増えているということも記載がある。免許を取り、実際に現場にどれぐらいの人が出るのか気になったし、若い人の絶対数、人数そのものが減っていると思う。そんな中で、若い人に狩猟の現場にどんどん出てもらう方法はどんなことがあるのか。

(部会長)

猟友会のほうから最初に話してもらい、自然保護課。

(専門員)

まず、狩猟免許取得に関しまして、猟友会は積極的に支援を行っている。従前どおり試験前にいろいろレクチャーを行い、そのほかに、狩猟ガイダンスを年3回、県から委託を受けて行っている。

たくさんの方が狩猟免許を取得するが、その大半がわな免許になる。それと、わな免許取得の年齢層は定年退職後、自由な時間が増えた方、その中でも、集落単位で代表者を決めて来られる方が多いので、狩猟免許取得後に現場に出て

くるという部分に関して言えば、自分のところに入ってきた鳥獣を防ぐ方向でやっていると思う。

若手で狩猟を積極的にやって、県の補助事業で、OJTに参加してやっている方も確かにいるが、やはり育成という部分においては、2年、3年で一人前になれるようなものではない。やはり時間がかかる。今、県は早急に、ベテランの技術をOJT等を通して若手へ伝えていっている最中であることを理解してもらえればと思う。

また、大日本猟友会で独自に、ベテランの方が引退したときに、その方が所持していた銃を若手へ譲る場合、取得費用の一部を補助しようというようなことも、去年、今年あたり議論されている。

富山県のみならず全国的で若手の育成が課題になっている。

(部会長)

これは自然保護課からも話を聞きたいが、狩猟者ばかりでなくて、カラスやハクビシンとか業として駆除をやっている会社がある。

(事務局)

今、部会長からも話にあったハクビシンとか小動物を駆除しているのは、駆除業者であると認識している。

ただ、イノシシ等の大型獣は、これだけを専門というのはなかなかないが、今のジビエも含めて、黒部で獣肉加工施設を持っていて、NPOを立ち上げたりとかということで、有害駆除等々の補助金もうまく活用しながら活動を始めているところは実際ある。

そういうところには、我々、補助金も含めて、継続的な活動ができるように支援を続けていきたいと思っている。

ただし、今現在においては、狩猟の主な担い手はやはり猟友会に頼っているのが現状であるので、OJT研修等々については、猟友会員を中心に行わせてもらっているところである。

なお、免許の取得等々については、ちょっと時間の都合があるが、若手も若干だが増えながら、今行っているところなので、この方々がいかに捕獲の中心を担ってもらえるかが、これからの課題と思う。

(部会長)

県からも会員の拡大に支援がなされているとは聞いているが、これからも猟

友会のほうをバックアップして、猟友会に負担をかけないようにしてあげてほしいと思う。

銃刀法の改正とか、銃の所持形態もだんだん厳しくなっている部分も一方であるが、その辺も、もうちょっと銃刀法を緩くしてもらえたら。警職法に基づいて活動できるとかではなくて、大変難しいことかもしれないが、県内の猟友会が最後に判断できるようになったらよい。銃器を使うとなると、警察とも協議が必要になってくる。

(専門員)

ちょっと鹿の状況について教えてもらいたい点があるが、管理計画の評価だと、高山帯への侵入防止ということで計画の目標を書いている。

我々のほうで昨年度の報告書とかを見ると、長野県では上高地のほうにも、もうシカは定着というか、毎年目撃もされていて、後立山、大町のほうからは富山県と長野県の稜線3,000メートルの付近で目撃等もされているような状況で、富山県のデータで、弥陀ヶ原や、室堂までは行っていないかもしれないが、高山帯とか高山帯の近くまで確認がされているという印象を受けている。

その中で、捕獲頭数を見たら、令和元年度だけ若干減っているようにも見受けられるが、富山県内の鹿の生息状況としては、なかなか密度が薄くて捕れないという状況があると思うが、イノシシのほうも10年前は恐らくそういう状況で、10年後は相当数拡大し生息数、生息範囲が拡大したということは、ニホンジカも同様と思うが、その辺りで、捕獲努力でどれぐらい頭数を捕って、農林業被害も含めてどのくらいの被害が出ているのか。この捕獲努力量としては昨年度と同じ量で107頭であるので、若干微減まで向かっているのか、その辺が感覚として分からないので、県や猟友会のほうで教えてもらえばと思う。それによって我々も高山の対策とか、どういうふうにしていくかというのも併せて検討していく必要があると考えている。

(事務局)

ニホンジカについては、高山帯への侵入というのも、イノシシと同じくカメラ等で確認している。ただ、言葉が適切かどうか分からないが、定着までにはまだ至っていない段階と把握をしている。

なお、ニホンジカについては、平成27年度末に一度生息頭数調査をやっていて、県内全域で988頭ということで、これを基に177頭の捕獲、この個

体数を増やさないということで目標を立てて実施しているところである。ただし、かなり密度が薄いということで、努力はしているが至っていないのが現状である。

なお、捕獲努力量につきましては、ニホンジカの捕獲については、捕獲専門チームによるくくりわなを中心とした捕獲をしているが、そのチームを年々増やしてきている状況であるので、捕獲努力量は逆に増やしているような状況だが、なかなか捕獲数自体は追いついていない状況である。

先ほど担当からも説明したが、本年度、生息数が比較的、多い八尾と砺波に新たにチームを設置して捕獲を開始しているところである。

(専門員)

農林業被害は、そんなに顕著に増えている感じはない。密度は薄いという感じ。

(事務局)

農業被害という点では、まだ明確に数字は上がってきていない段階だが、林業被害は、森林政策課のほうで植えている無花粉スギの植栽地において被害等が確認されている。ただ、まだ大規模でまとまった被害には至っていない状況で、今モニタリングを続けている段階である。

(専門員)

ニホンジカに関してだが、確かに狩猟等における捕獲数というのは非常に少ない。目撃数も確かにあまりないが、長野県、岐阜県、奈良県、福井県、京都府等で、私が聞き及んだところでは、イノシシと関連してくるが、イノシシの生息密度が薄くなると、逆に鹿の生息密度が増すといった具合で、例えば長野県上田市ではイノシシをみんな一生懸命捕ったところ、今度は鹿が増えたということで、今度は山林のほうに被害が及んできた。長野県においてはヒノキの被害が非常に大きくなったと聞き及んでいる。

県は、そういったことも含めて検討してもらっていると思うが、今後、鹿については注視していくべき事柄でないかと思う。

(部会長)

ヒノキ被害というのはカモシカが多い。長野、岐阜とか、大きな問題になっている。ニホンジカも広がるんじゃないかという話なので、そうかなと思う。

(委員)

食べるものから言うと、スギよりもヒノキのほうがおいしい。広葉樹は皮も食べて、その後がヒノキ…。特に、植えた後を食するので、事業先進県では壊滅的なダメージになってしまって、富山県もこの後そうなることのないように祈っている。またぜひ県の力を借りたいと思っている。

(委員)

クマの部分に絡んでくるかと思うが、果樹の伐採とかをやってもらっているが、実際に北陸自動車道の近くというか市内で、夏にクマが出没した。

やはりでかい屋敷が空き地になっていて、ハクビシンとかいろいろなほかの動物も寄りつくし、空き家問題というのが鳥獣問題にも大きく影響してくるだろうという印象を最近持った。